

人 口

総 人 口

大正9年の第一国勢調査では1336千人であつたが、昭和22年には210万人に達し、35年10月に行われた国勢調査では230万人を越え、40年間に97万人73%の増加をみせた。

人 口 密 度

1平方軒当り人口は大正9年に264.0人であつたが、昭和10年には305.5人となり、終戦後の昭和22年には417.4人、更に昭和35年には458.0人となり大幅な人口増加を物語つている。

人 口 動 態

出生及び死亡率（人口千人に対する割合）の戦後の推移をみるとつぎのとおりである。出生率は昭和22年に35.0人であつたが、25年には26.9人、30年が19.8人、34年には17.3人と減つている。死亡率は昭和22年の14.6人から、昭和34年の8.1人と半減し、出生率とほぼ同じ減少傾向をみせている。

社 会 増 減

戦後の人口の社会異動の状態をみると、本県と他県との転入、転出は、昭和31年までは転出が転入より大きく、いわゆる人口赤字の状態であつたが、32年以降転入超過に転じた。この状態を地区別にみると、国電沿線及び東京湾に面した県北西部は、住宅地造成や工業誘致に伴い、流入が著しく増えている。逆に北西部以外の農村地帯では人口流出が30年以降特に目立つている。以上の傾向は30～35年の（5年間に）国勢調査にはつきりあらわれ、県北西部は増え、農村地帯は減つている。